

教科における道徳教育

—広島大学附属小学校道徳教育研究会著『授業における道徳』の場合—

神 野 正 喜*

(2015年2月6日 受理)

A Study of Moral Education in the Subject

—In the Case of the Elementary School Attached to Hiroshima University—

Masaki JINNO*

It is written in the Course of Study, "The moral education in the school performs class for morality through all educational activities in the school." But, it cannot be said that the morality in the subject is accomplished enough. I clarify how the morality in the subject was carried out in the Elementary School Attached to Hiroshima University.

Keywords: moral education 道徳教育, subject 教科, all education activities 学校のエデュケーション全体

1. はじめに

現行の学習指導要領（平成20年3月28日告示）の「第1章 総則」の「第1 教育課程編成の一般方針」には、「学校における道徳教育は、道徳の時間を要（かなめ）として学校の教育活動全体を通じて行うもの（後略）」とあり、「第3章 道徳」の「第1 目標」には、「道徳の時間においては、（中略）各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、（後略）」との文言がある。

ここに見える「学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育」という基本の考えは、昭和33年以降、学習指導要領の5回の改訂を経ても変わることなく、今日まで一貫している。しかし、各教科や特別活動等の領域における道徳教育がどのような理念に基づいて具体的にどのように実施されたのかについての報告は決して多くはない。本稿の目的は、学校の教育活動全体の中でも教科に焦点を当て、教科における道徳教育がどのように行われたのか、その先行事例を採り上げ、再評価することである。

2. 学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育

昭和33年に改訂された学習指導要領（昭和33年10月1日施行）によって、道徳が新たな領域として設けられ、道徳の時間が実施された。その中（「第1章 総則」の「第1 教育課程の編成」の「第3 道徳教育」）には、「学校における道徳教育は、本来、学校の教育活動全体を通じて行うことを基

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

本とする。したがって、道德の時間はもちろん、各教科、特別教育活動および学校行事等学校教育のあらゆる機会に、道德性を高める指導が行われなければならない。(中略) 道德の時間においては、各教科、特別教育活動および学校行事等における道德教育と密接な関連を保ちながら、これを補充し、深化し、統合し、またはこれとの交流を図り、児童の望ましい道德的習慣、心情、判断力を養い、社会における個人のあり方についての自覚を主体的に深め、道德的実践力の向上を図るように指導するものとする。」とあるように、学校においては、学校の教育活動全体を通じて道德教育を行うことが基本とされている。

これに先立つ「道德教育のための手引書要綱」(昭和26年4月)には、すでに「道德教育は、学校教育の全面においておこなうのが適当である」と記されており、昭和26年に改訂された「学習指導要領一般編(試案)」の「Ⅱ 教育課程」の「1. 小学校の教科と時間配当」の「d) 道德教育について」には、「道德教育は、その性質上、教育のある部分でなく、教育の全面において計画的に実施される必要がある。(中略) 学校教育の全面において、道德的態度を形成するための指導を行うということは、各教科の学習や特別教育活動がそれぞれの役割をじゅうぶん果たして、互に関連をもって行われること、すなわち、全体計画に基いた教育が推進されるということではなくてはならない。」と述べられている。いわゆる全面主義の道德教育である。

戦後初期、道德教育についての指導方針が明示されていない時期があるが、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育は、昭和33年に「道德」が特設される以前の昭和26年から今日まで、我が国の道德教育の基本とされてきた。

3. 特設「道德」以降の、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育

では、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育が、実際には如何に実施されてきたのであろうか。それを知り得る資料は、多くはない。道德の時間の授業については、道德が特設されて以降、数多くの実践記録が発表されている。それに比して、教科や特別活動における道德教育の具体的な取り組みを記録した資料は少ない。その理由として、道德が特設された当時、現場の教師に、道德教育は特設された道德の時間になされるものと誤解されたことがある。それまでの「学校における道德教育は、学校の教育活動全体を通じて行う」という基本的な考えを改めたわけではないにもかかわらず、教科等でも道德教育はなされるという認識が薄くなったという事情がある。そのあたりの経緯を説明して、押谷由夫は、次のように述べている。

「道德の時間」特設反対派の人たちは、道德の時間が特設されることによって、各教科等から道德教育が抜き取られたととらえた。そして、道德の時間が現実の生活や学習活動と離れて理念的な(押し付け的な)指導が行われると批判した。「道德の時間」特設後の動向を見ると、この批判は、ある程度当たっているように思える。それは、学校現場において、道德の時間の正しい認識ができていなかったことも影響している。教科的にとれば、各教科は独立して存在しているから、道德の時間で道德教育が独自になされると考えられるからである。そしてまた、文部省においても、道德の時間の確立を図るために、道德の時間の授業の独自性をことさら強調したことも影響しているといえよう。(中略) そして、道德の時間が確立していくにしたがって、各教科や特別活動における道德教育について話題にされることが少なくなっていく。例えば各教科の研究会において道德教育との関連について発表されることはほとんどない¹⁾。

「各教科の研究会において道德教育との関連について発表されることはほとんどない」状態にあっては、その記録等が残されていないのは無理のないところであろう。

4. 教科における道德教育

そのような状況にあって、1978（昭和53）年6月に、広島大学附属小学校道德教育研究会『授業における道德』（学校教育研究会）が刊行されている。書名は「授業における道德」であるが、教科の教育活動が具体的になされる場である「授業」を冠しているのであって、「教科における道德」と同義に理解してよいと思われる。

この書は、「まえがき」に「子どもを人間らしく成長させ、人間として形成する機能を教育作用ととらえるならば、教育の課題は、とりも直さず道德教育の課題そのものである。道德教育は、すべての教育活動にわたって行われるべきであるとの主張は、このような教育のとらえ方を出発点としている。（中略）わたしたちの教育実践があるところ、子どもを人間らしく形成しようとの意図や戦略があることに、異を唱えるものはいないであろう。わたしたちはその意図や戦略に支えられた実践記録を、ここに『授業における道德』としてまとめることにした。」とあるように、各教科において、人間形成の観点から、如何なる教育活動が可能であるかを理論面、実践面の両方から追究した成果をまとめたものである。

（1）授業のもつ人間形成的機能

『授業における道德』には、授業のもつ道德に関わる働きを3つに整理して捉えている。すなわち、「学習内容のもつ人間形成的機能、学習方法（教科独自の）のもつ人間形成的機能、学習規律（各教科共通の）のもつ人間形成的機能」の3つである。それぞれを説明して、同書には、次のように述べられている。

○学習内容のもつ人間形成的機能

一定の文化価値を備えた教科内容であるかぎり、つねにそれ自体が内在的な力を持っている。そしてその内容を習得した結果として、知識が豊富になるばかりではなく、もののみ方や考え方、一定の価値基準と価値判断に対して作用せずにはおかないのである。このように教科内容そのものが本来的に具有しており、その内容を習得する結果として人間形成のうえに及ぼす訓育の働きを、学習内容のもつ人間形成的機能とよぶのである²⁾。

各教科の教科内容の中には、児童の道德性の育成に関係の深い事柄が含まれている。直接的か間接的かは別にして、その内容が道德教育と全く無縁である教科は存在しない。学習指導を通して、教科内容の習得・習熟と同時に人間形成が行われることが、学習内容のもつ人間形成的機能と捉えられている。

○学習方法（教科独自の）のもつ人間形成的機能

教科内容を正しく子どもに「伝達」するためには、（中略）一定の教科に固有の探究方法や独自の構造に基づいて学習活動を発展させなければならない。これを子どもの立場から見れば、それぞれの教科に固有の学習方法を武器として、困難な課題に立ち向かうのである。（中略）その教科に独自の推論方法ないしは探究方法がある。子どもたちはこれらの諸方法を武器としてみずから戦略を立てながら、教科の内容にたちむかうのである。このレベルの教育作用が人間形成のうえで及ぼす働きを、学習方法（教科独自の）のもつ人間形成的機能とよぶのである³⁾。

各教科には、その教科内容と不可分の教科独自の学習方法があり、それに基づいて学習活動を展開する過程において、教科独自のものの見方や考え方を習得したり、「困難な課題に立ち向か」ったりすることがある。それを、学習方法（教科独自の）のもつ人間形成的機能と捉えている。

○学習規律（各教科共通の）のもつ人間形成的機能

学級の子ども全員を学習主体に育てあげ、授業への共同的な参加のスタイルを形成していく側面の教育である。授業者は少なくとも一年間という長期の過程のなかで、その学級集団独自の授業のスタイルをつくりあげるのである。いわば授業を進めていくうえでのルール（規律）を意識的に形成していくことであるといってもよい。（中略）このレベルの作用は、どの教科の指導においても共通になされなければならないのである。このように、どの教科にも共通して、学習ルール（規律）を学ばせるような教育の働きを、学習規律（各教科共通の）のもつ人間形成的機能とよんでいるのである⁴⁾。

学級という学習集団の中で、教科内容を習得しようとするれば、一定のルール（規律）が必要である。そのルール（規律）は、どの教科にも共通するものであることが多い。授業におけるルール（規律）のもつ教育力にも着目して、これを学習規律（各教科共通の）のもつ人間形成的機能と捉えている。『授業における道徳』では、これら3つの機能が同時に働くことを基本としている。

（2）学習集団の道徳性養成機能

各教科の授業は、学級を単位として行われることが多い。学級は、生活集団であると同時に学習集団でもある。『授業における道徳』の特色の一つとして挙げ得るのは、その学習集団（学級）の授業力に着目している点である。

①「学級のれきしづくり」が学習集団の授業力を高める

教科における道徳教育、即ち授業における道徳養育を考えようとするれば、その授業がなされる学級の学習集団としての質が問われる。質が低ければ、教科内容の習得はもちろんのこと、道徳性を養うことは難しい。

そこで、「人（とりわけ教師や親）からやらされる学習よりは自分たちの力でする学習の方が値うちがある」との考えに立ち、「自分たちの経験したこと、他の子どもの意見を聴いて気づいたこと、発見したことをみんなの前に出し合」い、「一步一步、みんなの力で客観的心理（教科内容の本質）に迫っていく」ことができる状態を、学級の子どもたちに「授業の実力」ある状態だと捉え、その「授業の実力を高めていく歴史的過程として授業時間をとらえることを含めて、『学級のれきしづくり』と呼⁵⁾」んでいる。

この「『学級のれきしづくり』の発想そのものは、学級（習）集団づくり実践それ自体から出ている。すなわち、子どもたちを学校生活の主人公にしていくという考えから出ているのである⁶⁾。」という。そして、「子どもを学校生活の主人公にするということは、各教科の学習の場面で自分の考え方を出し合い、『わからない』といういことができ、わかるまでねばり強く追求してしていくような子どもたちにしていくことであり、教科外の活動においても自分たちの力でさまざまな具体的内容を実現していくことである⁷⁾。」と説明されている。

「学級のれきしづくり」には、教師の意図的な働きかけが必要である。教師が意識的・目的的に関わることによって、学級集団が、わが「学級のれきし」を意識し、集団としての自覚が芽生え、授業力が高まるのである。

②学級の全員参加体制づくり

『授業における道徳』には、学習集団（学級）の授業力を高めるには、子ども自身の手で、全員が学習活動に参加できる体制づくりが必要である、と説いている。

そのためには、「全員参加へのシステムを学習集団のなかにつくりあげることも、学習集団の授業の重要な特質なのである」として、次のような例を挙げている。

○子どもたち自身の手で授業時間の始めと終りなどの管理ができる。

○発表力の弱い子どもでも、自分の考えを出すチャンスが保障されるばかりでなく、「発表の練習」や「はげまし」などの援助活動を通して教科内容への挑みがかかりができるようになる。

○よそ見、手わるさ、ぼんやりなどによって授業に参加していない子どもにも、子ども相互で注意し合ったり、その原因を話し合うことで除去することができる⁸⁾。

③説得力のある表現力の育成

全員参加の授業をつくり、そのような授業を可能とする学習集団をつくるためには、個々の学習者の思考活動の成果を外に出すこと（表現）によって、交流が図られなければならない。交流することによって刺激を受けた互いの思考活動がさらに活発になることもある。そこで、重要視されるのが、聴き手を説得できる表現力である。

以上のような方法によって授業力の高まった学習集団での授業においてこそ、人間形成（道徳性を養うこと）は期待できるのである。

（3）学習規律の指導

授業において、学習規律は必要不可欠のものである。その学習規律によって、あるいは、学習規律を習得することを通して道徳性は養われる。『授業における道徳』には、「学習規律のなかにもさまざまな内容があることがわかる。つまり、これを教師の指導すべき内容としてみると、1. 発表のし方の指導 2. 発表の聴き方の指導 3. リーダーや班への指導 の三つにまとめることができるのである⁹⁾。」と述べて、学習規律の指導の見とおしを、次頁に掲げた表に示している¹⁰⁾。

5. 教科における道徳教育の実際

『授業における道徳』には、各教科の実践例が紹介されている。ここでは音楽科を取り上げて、授業のもつ人間形成的機能がどのように考えられていたのかを見てみよう。

○学習内容のもつ人間形成的機能

ア みんなと揃えることによる美しさの表現

イ バランスによる音楽的な厚味の表現

ウ 自己中心的な感覚から、より客観的な感覚への成長

エ 模倣から創造への意欲と能力の表現¹¹⁾

○学習方法（教科独自の）のもつ人間形成的機能

これについては、学習集団と主体的学習の2つの面から説明がなされているが、ここでは、学習集団のもつ人間形成的機能についての説明を示しておく。

音楽の学習場面では、（中略）どのような教科の学習場面よりも、学習集団の必然性を強く内在している。それは、個人の表現技能ということも重要な指導内容であるが、より以上に、集団による表現能力、集団による学習効果ということも重視しているからである。（中略）

表1 学習規律の指導の見とおし

段階 内容	1	2	3
発表のし方の指導	○とにかく全員がみんなの前で話すことができる。 (全員発言運動として班競争 教師の評価, 子どもの相互評価を通して, 発言形式の導入, 班の話し合い)	○発問屋課題の内容の高まりに沿った話し方ができる。 ○人の発表に対する質問, つけ加え, 考えた意見が発表できる。 ○図や地図や表などを用いての発表ができはじめる。 (身ぶり, 手ぶり)	○証拠や論拠をあげて, 聞く子どもの表情をみながら説得力のある発言ができる。(対話的な発表) ○班の話し合いができる。 ○質の高い話し合いができる。(集団思考を深化させることができる)
聴き方の指導	○できるだけ発表者の方を見て最後まで聴く。(教師の評価, 相互評価を通してなど) ○発表の内容を正確に聴きとる。(班内での確かめ, 反復)	○発表者に対して, 返事, うなずき, あいづち, 疑問の表情が出せはじめる。	○予想, 自分の意見との比較, まとめなどができる。
班・リーダーへの指導	○班員相互の注意や援助活動を惹き起こす。(学習準備, 態度など) ○班長がヤル気を示し, まず自分が発表に自身をもつ。(班の話し合いの導入)	○班の話し合いの時間設定をする。 ○班指名の場合でも発言者をスムーズに決めることができる。 ○班と班との競い合いの中で高まる。「わからない」「ストップ」が言えはじめる。 ○班長が司会をして全員の発表ができる。(パネルの導入)	○課題解決にむかって, 班の意識をのりこえて学級全員の力を動員することができる。 ○班の話し合いの質が高まる。

学習集団が、音楽の「学習集団」となり得るためには、構成員としての全児童が、同じ学習課題をそれぞれ自分たちの学習目標として捉え、共通に課題解決のための意欲を抱き、その方法に向って協力し合って進もうとするものでなくてはならない。そこで始めてその学習集団は、学習集団となり得たと言えるのである¹²⁾。

○学習規律（各教科共通の）のもつ人間形成的機能

学習規律として、各教科共通のものも挙げられているが、音楽科特有の学習規律も挙げられているので、それを示すことにする。

- ア 音楽室に入ったら、直ちにノートを拡げて写譜をする。
- イ 挨拶のあとは、すぐにピアノの周りに集まる。
- ウ 音楽の時間は、美しい声で歌うのが勉強だということを徹底させる。
- エ 均斉美、調和美を感じとらせ、それを音楽語いとして把握させる。

オ 楽器の保全，管理を確実にさせる．

カ 自分勝手な音を出さない．

キ 思ったこと，感じたことは，どんな小さなことでも必ず発表させる¹³⁾．

音楽科では，学習内容のもつ人間形成的機能，学習方法（教科独自の）のもつ人間形成的機能，学習規律（各教科共通の）のもつ人間形成的機能について，以上のように捉え，第1学年の授業（昭和53年2月3日実施，教材「きれいに合わせよう『うれしい小鳥』」）を通して，それらの機能の具体について報告している．

6. おわりに

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の中でも，教科における道徳教育の先行実践事例を『授業における道徳』に求め，その概要を紹介した．文部科学省『小学校学習指導要領解説道徳編』（東洋館出版，2008年8月）の「第6章 教育活動全体を通じて行う指導」には，各教科等における道徳教育についての記述が見えるが，それまでは，基本の考えとしての位置づけはあっても，具体的な方法までは示されていなかった．そのような状況にあって，『授業における道徳』が目指したところには，先見性を認めることのできるのである．

<引用文献>

- 1) 押谷由夫，道徳教育の論争―特設「道徳」をめぐる一，行安茂・廣川正昭編『戦道徳教育を築いた人々と21世紀の課題』教育出版，2012. 6，pp. 238-239
- 2) 広島大学附属小学校道徳教育研究会『授業における道徳』学校教育研究会，1978. 6，pp. 73-74
- 3) 同上書，pp. 74-75
- 4) 同上書，p. 75
- 5) 同上書，p. 79
- 6) 同上書，p. 80
- 7) 同上書，p. 80
- 8) 同上書，p. 83
- 9) 同上書，p. 90
- 10) 同上書，p. 98
- 11) 同上書，pp. 264-266
- 12) 同上書，pp. 266-267
- 13) 同上書，pp. 259-261